教育情報学研究　第10号（2011）
Educational Informatics Research, 2011, No. 10, 1-13

障害児を育てる母親のレジリエンスの実態
-半構造化面接調査による質的研究-

橋本　真規*，橋本　陽介**,***，熊井　正之****

*明星大学人文学部
**東北大学大学院教育情報学教育部
***日本学術振興会特別研究員（DC）
****東北大学大学院教育情報学研究部

要旨：近年、欧米を始めとする諸外国において多くのレジリエンス研究がなされているが、我が国においてはそれほど多くなく、さらなる知見の積み重ねが必要な分野である。また、障害児の親を対象にレジリエンスの実態を明らかにした研究は、筆者の知る限り未だ見られない。本研究の目的は、障害児を育てる母親のレジリエンスがどのような要素から成り立っているかを明らかにすることである。16〜17歳の障害児を育てる母親３名を対象に、子育て経験を振り返る７項目について半構造化面接による面接調査を実施した。主な結果は、以下の通りである。(1)全面接からは、91のコード、26のサブカテゴリー、６のカテゴリーが抽出された。(2)レジリエンスの要素として、《I have》《I can》の２つが抽出された。以上の結果を踏まえ、レジリエンスの構成要素と今後の課題について考察した。

キーワード：障害児の母親，レジリエンス，半構造化面接調査

１．はじめに

これまで障害児を育てる親や家族を対象に国内で行われてきた研究は、三木（1956）に始まり、親の養育態度研究や親のストレス研究、子どもの障害受容過程等様々な視点からのアプローチが見られる。しかし、北沢（1992）は知的障害者の家族問題についての研究は非常に少なく、体系的になされていないことを指摘しており、特に障害児の援助者としての保護者に焦点をあてた親研究は少ない（石隈・上村, 2001）。

数少ない親研究の中でも、最も研究がなされてきたテーマの一つとして、障害児の親のストレス研究が挙げられる（橋本, 1980; 新美・植村, 1980; 小椋ら, 1980; 稲浪ら, 1980; 植村・新美, 1981; 植村ら, 1982; 蓑毛, 1984; 新美・植村, 1987; 稲浪ら, 1994; 田中, 1996; 刀根, 2002; 渡部ら, 2002; 種子田ら, 2004; 工藤・奥住, 2008; 坂口・別府, 2007）。先行研究では、障害児の親のストレスと障害種や年齢、家族要因等との関連や、ストレスの背景となる要因が明らかにされている（工藤・奥住, 2008）。このように、障害児の育児と、親のストレスには密接な関係があると言えよう。しかし、これらの研究では、親のストレス構造や関連要因は明らかにされているものの、ストレスフルな状況下における母親の心理的特性に焦点を当てた研究は少ない。ストレスフルな状況におかれた人間についての研究では、個人がストレス状態におかれた時にどのように対処するかという「ストレス・コーピング」や、ストレスに対する個人の心理的、精神的な耐性である「ストレス耐性」との関連が検討されてきた。さらに、近年では、レジリエンス（resilience）との関連が注目されつつある（河上ら, 2005; 石井, 2009）。

レジリエンスという言葉は、19世紀には「弾力性」や「反発力」を示す物理用語であった。その語源には「跳ね返す」の意味があり、ある物体に加わろうとするストレスに抗して元の形状や状態に戻ろうとする力のことで、それが1970年代からは、逆境で生育したにもかかわらず、精神病理学的にそれほど重篤な障害を残さずに生育した子どもの特性を表す用語として、主に心理学、さらに精神医学に導入され、防御と抵抗力を意味する概念として用いられるようになった（石井, 2009）。Rutter（1985）は、同じよ

うにストレスフルな体験をしても、すべての人が不適応症状を示すわけではないことを見出し、このような個人が示す特性について、レジリエンスという概念を提唱した。我が国においても、レジリエンスについては文献研究を含めた検討がなされており（河上ら, 2005; 石井, 2009）、最近注目されつつある重要な分野と言えよう。また、レジリエンスは、これまで虐待や貧困等の深刻な状況におかれた者を対象に検討されることが多かったが、最近では、レジリエンスが個人の日常生活に果たす役割についても検討する意義があると指摘されており、研究対象となる領域は広がりを見せている（中野, 2008）。これまで、欧米を始めとする諸外国において多くのレジリエンス研究が行われてきたが（Rutter, 1985; Wagnild et al., 1993; Grotberg, 1995; 1999; 2003; Hiew et al., 2000）、我が国においてはそれほど多くなく（森ら, 2002）、さらなる知見の積み重ねが必要である。そこで、まずは、レジリエンスの定義、構成概念と尺度について概観する。

まず、諸外国におけるレジリエンスの定義について見ていこう。

レジリエンスの概念を最初に示した Rutter（1985）は、ストレスに対する防御に影響するストレス反応の個人差である「深刻な危険性にもかかわらず、適応的な機能を維持しようとする現象」と定義し、深刻な状況に対する個人の抵抗力とした。

レジリエンスについて各国で大規模な調査を行った Grotberg（1995）は、「避ける事のできない逆境に立ち向かい、それを乗り越え、そこから学び、さらにそれを変化させる能力」と定義した。

アメリカ心理学会（2008）では、「困難、あるいは重篤な人生経験に対してうまく適応する過程や結果。特に外的・内的な需要に対して、精神的・情緒的・行動的な柔軟性や順応性を持ってうまく適応する過程や結果」と定義した。そして、レジリエンスは性格等の特性ではなく、人々が保持している行動や思考、行為に含まれ、誰でも学習することが可能であり、また、発展させることができるものであるとしている。

一方、我が国では、レジリエンスを以下のように定義している。

まず、レジリエンスを個人の心理的な特性と捉え、定義した研究について見ていこう（森ら, 2002; 石毛・無藤, 2005b; 日高・尾崎, 2007; 中野, 2008; 井隼・中村, 2008）。

彼らは、レジリエンスを「逆境に耐え、試練を克服し、感情的、認知的、社会的に健康な精神活動を維持するのに不可欠な心理特性（森ら, 2002）」「ストレスフルな状況でも精神的健康を維持する、あるいは回復へと導く心理的特性（石毛・無藤, 2005b）」「困難な出来事を克服し、その経験を自己の成長の糧として受け入れる状態に導く特性（日高・尾崎, 2007）」「困難な状況下で心理状態がネガティブに陥っても、それを回復できる個人の心理面における弾力性（中野, 2008）」「有害な出来事によるダメージを和らげるパーソナリティ特性の一種（井隼・中村, 2008）」と定義した。

次に、レジリエンスを個人の能力、力と捉え、定義した研究について見ていこう（石毛・無藤, 2005a; 仁尾, 2008a; 2008b; 藤原, 2009; 佐藤・祐宗, 2009）。

彼らは、レジリエンスを「ストレスフルな出来事によって落ち込んだ、ネガティブな心理状態から立ち直るための精神的回復力（石毛・無藤, 2005a）」「非健康的な環境の中で健康を維持するためのキャパシティ。ある時間内で、病気、心の混乱、逆境や非観の淵から立ち直る力（仁尾, 2008a; 2008b）」「避ける事のできない逆境に立ち向かい、それを乗り越え、そこから学び、さらにそれを変化させる能力（藤原, 2009）」「いわば精神的ホメオスタシスとも呼ぶべきでものであり、心理的復元力、心理的回復力、心理的立ち直り等と表現できるものである（佐藤・祐宗, 2009）」と定義した。上記以外にも、様々な定義がある（澤田・上田, 1997; 石井ら, 2007; 西ら, 2010; 葛西ら, 2010）。

澤田・上田（1997）は、レジリエンスを「強靭性」「弾力性」と訳し、レジリエンスは「個人の能力」ではなく、「生活上の困難や災害が引き起こす障害を予防し、最小限にし、克服するものであり、生命を強める普遍的な可能性であり、環境により変化する力動性がある」とした。

石井ら（2007）は、「本来人間が有し、個人内で発達させる事ができ、また可逆的で促進させることができる人間の基本的な生きる力を強める機能」とし、周囲からの有効な働きかけにより個人内部のレジリエンスを高めることで、危機状況からの回復を

促進できると考えた。

西ら（2010）は、「強いストレッサーを経験しても精神疾患を発症しない状態」と暫定的に定義した。

葛西ら（2010）は、「ストレスやネガティブなライフイベントを跳ね返したり、あるいはダメージから回復を促したりする、いわゆる「心の強さ」を示唆する概念である」とした。

このように、我が国においても、レジリエンス研究が盛んに行われつつあるが、その見解は様々であり、統一された定義を持っていない。

次に、レジリエンスの構成要素を明らかにした研究について見ていこう。

Grotberg（1995）は、保育者評定による子ども用のレジリエンス測定尺度を作成し、「I have」「I am」「I can」の 3 因子を抽出した。この研究は、その後、我が国において、レジリエンスの実態を明らかにするための尺度項目の作成等で多用されており（Hiew et al., 2000; 森ら, 2002; 仁尾・藤原, 2006; 河上, 2009）、貴重な研究であると言えよう。

そこで、Grotberg（1995）を基に、レジリエンスの構成概念を明らかにした各々の研究について概観する。

Hiew et al.（2000）は、大学生を対象に、現在のレジリエンスを測定する尺度（State Resilience Inventory; SRC）、および子どもの頃のレジリエンスを測定する尺度（Trait Resilience Inventory; TRC）を作成した。SRC 尺度は、15項目、「I am/I can」「I have」の 2 因子構造であった。TRC 尺度は、18項目、「I can」「I have」「I am」の 3 因子構造であった。レジリエンスは、興味や感情的健康を促進するだけでなく、不安や落胆、怒りといったネガティブな感情の徴候を有意に減少させることが明らかになったとしている。

森ら（2002）は、大学生 789 名を対象に、レジリエンスと自己教育力との関係を明らかにするため、Hiew et al.（2000）が作成したレジリエンス尺度を参考に新たに29項目を作成し、質問紙調査を行った。因子分析によって構成概念妥当性を検討し、「I AM」「I HAVE」「I CAN」「I WILL/DO」の 4 因子を抽出した。「I AM」は、「本当の自分」から目をそらさずにそれを見つめる力、「I HAVE」は、他者との信頼関係を築き、学びのネットワークを広げていく力、「I CAN」は、試練を乗り越え問題を解決していく力、「I WILL」は、自分自身で目標を定め、それに向かって伸びていく力であると考察している。

仁尾・藤原（2006）は、先天性心疾患をもつ高校生16名を対象に、先天性心疾患をもち生活に制限を抱える思春期にある人のレジリエンスの要素を明らかにするため、半構造化面接調査を行った。レジリエンスを構成する内容を抽出した後、それぞれを「I Have」「I Am」「I Can」の 3 要素に分類した。「I Have」は、親、家族、友達、学校の先生の存在、「I Am」は、病気を持つ自分を受け入れようとすること、「I Can」は、病気の管理ができること、学校生活や仲間関係が円滑であること等であり、これらは、何らかの生活上の問題を継続的に抱えて成長する彼らのレジリエンスの要素として重要であるとしている。

河上（2009）は、在宅中心静脈栄養法を施行している学童期の子ども 5 名とその親 5 名を対象に、彼らのレジリエンスの実態を明らかにするため、半構造化面接調査を実施した。レジリエンスを構成する内容を抽出した後、それぞれを「I have」「I am」「I can」の 3 要素に分類した。「I have」では、子どもは母親の存在が中心である一方、親は、家族、他児の母親、自分を奮い立たせてくれる子ども、社会資源と多岐にわたるカテゴリーを持っていること、「I am」では、子どもは自分の事を普通だと捉え、将来を肯定的に捉え、友人関係を重視している一方、親は、他者との前向きな関係、積極的な性質に加え、子どもの代理として子どもの将来の計画を立てるカテゴリーが抽出されており、子どもとの密着した関係形成がうかがえ、「I can」では、子どもは、病気に関すること、家庭での生活に関すること、学校生活に関することに分かれたのに対し、親は、自分の行動、感情、表現方法、不安の軽減、コミュニケーション等多種多様なカテゴリーで構成されたと考察している。

このように、Grotberg（1995）を基に、レジリエンスの構成概念を明らかにした研究では、同じように、「I have」「I am」「I can」の 3 要素を構成した研究（Hiew et al., 2000; 仁尾・藤原, 2006; 河上, 2009）の他に、新たな構成要素を加えた研究（森ら, 2002; 仁尾, 2008a; 2008b）や、「I am」「I can」を統合し一つの構成要素とした研究（Hiew et al., 2000）があることが明らかになった。また、これら

の研究では、面接調査による質的研究だけでなく、心理尺度開発を目的とした定量的研究もなされており、Grotberg（1995）に基づいて構成概念を明らかにすることは、レジリエンスの実態を明らかにする上で重要な視点であると言えよう。

上記以外にも、各々が独自に作成した尺度を用いて、レジリエンスの構成概念を明らかにした研究がいくつか散見される（石毛・無藤, 2005a; 2005b; 石毛・無藤, 2006; 井隼・中村, 2008; 佐藤・祐宗, 2009; 大石・岡本, 2009; 小塩ら, 2002）。

石毛・無藤（2005a）は、中学生1218名を対象に、中学生用のレジリエンシー尺度を作成し、信頼性・妥当性を検証するために、独自に作成した22項目を用いて質問紙調査を実施した。因子分析によって構成概念妥当性を検討し、「前向き性」「自省性」「相談性」の 3 因子を抽出した。また、Cronbach の α 係数（α＝.69〜.74）によって各因子の内的一貫性を確認した。この調査では、尺度項目を作成するに当たり、面接調査を含むていねいな予備調査が行われており、信頼性・妥当性の高い尺度作成がなされていると言えよう。第一因子である「前向き性」は無気力感を独自に予測すること、相関分析より、レジリエンシーは、無気力感、自尊感情との相関が強かったのに対し、コーピングはそれら 2 つの概念との相関が弱かったことから、レジリエンシーは、コーピングとは異なる概念であることが明らかになったと考察している。

石毛・無藤（2005b）は、受験前の中学生 538 名、受験後の中学生 263 名を対象に、中学 3 年生の高校受験期の学業場面における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャルサポートの関連について検討するために、石毛・無藤（2005a）を元に作成したレジリエンス尺度21項目を用いて、質問紙調査を実施した。因子分析によって構成概念妥当性を検討し、「自己志向性」「関係志向性」「楽観性」の 3 因子を抽出した。また、Cronbach の α 係数（α＝.73〜.79）によって各因子の内的一貫性を確認した。ストレス反応の抑制には、レジリエンスの「自己志向性」と「楽観性」が強く寄与していたと述べている。

石毛ら（2006）は、中学生 905 名を対象に、レジリエンスとパーソナリティの関連を検討するために、石毛・無藤（2005b）が作成したレジリエンス尺度を用いて、質問紙調査を実施した。因子分析によって構成概念妥当性を検討し、「意欲的活動性」「内面共有性」「楽観性」の 3 因子を抽出した。また、Cronbach の α 係数（α＝.64〜.76）によって各因子の内的一貫性を確認した。「意欲的活動性」は男女とも「自己志向」、男子のみ「強調」と、「内面共有性」は、男子は「強調」、女子は「報酬依存」と、「楽観性」は、女子のみ「損害回避」と関連することを明らかにした。

井隼・中村（2008）は、大学生・専門学校生 447 名を対象に、レジリエンスの 4 側面（「個人内資源の認知」「個人内資源の活用」「環境資源の認知」「環境資源の活用」）を検討するため、それぞれ36項目、38項目、24項目、38項目を用いて、質問紙調査を実施した。因子分析によって構成概念妥当性を検討し、「個人内資源の認知」では、「楽観的思考」「社交性」「関心の持続・多様性」「有能感」の 4 因子、「個人内資源の活用」では、「楽観的行動」「熟慮的行動」「気ばらし行動」「状況分析行動」の 4 因子、「環境資源の認知」では、「家族資源」「友達資源」「仲間・先輩資源」の 3 因子、「環境資源の活用」では、「家族資源の活用」「仲間・先輩資源の活用」「友達資源の活用」の 3 因子を抽出した。これら 4 側面から捉えることで、レジリエンスをより具体的かつ包括的に把握できるようになったと考察している。

佐藤・祐宗（2009）は、大学生・就労者 554 名を対象に、就労上のストレス場面に対する成人のレジリエンスを促進する心理特性について検討するため、独自に作成した27項目を用いて、質問紙調査を実施した。因子分析によって構成概念妥当性を検討し、「ソーシャルサポート」「自己効力感」「社会性」の 3 因子を抽出した。なお、本研究では、尺度作成のために丁寧な項目の精選、折半法、内的一貫性（Cronbach の α 係数）による信頼性の検討、依存的妥当性、増分妥当性による妥当性の検討がなされており、信頼性・妥当性の高い尺度が開発されたと言えよう。レジリエンスは、他者と共存しつつ自分なりに納得のいく成果を出していると感じられる状態であり、先行研究である Grotberg（1995）、Hiew（1998）が提唱する「I have」「I can」「I am」と大きくずれる事ない因子を抽出できたと考察している。

大石・岡本（2009）は、大学生 116 名を対象に、青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連

を検討するため、石毛・無藤（2005b）が作成したレジリエンス尺度21項目を用いて、質問紙調査を実施した。因子分析によって構成概念妥当性を検討し、「関係志向性」「内省性」「楽観性」「遂行性」の4因子を抽出した。また、Cronbachのα係数（α＝.75～.86）によって各因子の内的一貫性を確認した。石毛・無藤（2005b）では、「自己志向性」「関係志向性」「楽観性」の3因子構造であったのに対し、「関係志向性」「内省性」「楽観性」「遂行性」の4因子構造になったことについて、調査対象者の年齢の差異に着目し、レジリエンスの構造が自我の発達に伴い変化していく可能性について考察している。

以上の研究からは、それぞれ命名には若干の違いがあるものの、類似した概念と理解しうる因子として「楽観性」、「社交性」「関係志向性」等の「社会性」、「家族資源」「友達資源」「仲間・先輩資源」等の「ソーシャルサポート」が挙げられた。また、「社会性」は、Grotbeg（1995）の対人関係力や問題解決能力を意味する「I can」、「ソーシャルサポート」は、外的サポートを意味する「I have」とも類似しており、レジリエンスの実態を明らかにする上で重要な構成概念であると考えられる。

また、レジリエンスの狭義として「精神的回復力」を提唱し、その構造を明らかにした研究がある。

小塩ら（2002）は、大学生207名を対象に、レジリエンス状態にある者の心理的特性について検討するため、精神的回復力尺度21項目を用いて、質問紙調査を実施した。因子分析によって構成概念妥当性を検討し、「新奇性追求」「感情調整」「肯定的な未来志向」の3因子を抽出した。また、Cronbachのα係数（α＝.77～.85）及びI-T相関によって尺度全体、各因子における内的一貫性を確認した。様々なことにチャレンジしていこうとする「新奇性追求」、自分の感情をうまく制御することができる「感情調整」、明るくポジティブな未来を予想し、その将来に向けて努力しようとする「肯定的な未来志向」という、男女で共通にみられる3因子を抽出できたと考察している。なお、作成された精神的回復力尺度は、その後の研究でも引用されており（西坂, 2006; 葛西ら, 2010）、レジリエンスを検討する際の重要な尺度であると言えよう。

レジリエンス研究における調査対象者は、幼児、中高生、大学生、就労者等広がりを見せているものの（森ら, 2002; 仁尾・藤原, 2006; 仁尾, 2008a; 2008b; 河上, 2009; 石毛・無藤, 2005a; 2005b, 2006; 井隼・中村, 2008; 佐藤・祐宗, 2009; 大石・岡本, 2009）、障害児の親を対象にその実態を明らかにした研究は、筆者の知る限り未だ見られない。よって、障害児の親のレジリエンスについて、探索的に検討する事が急務であると言えよう。

三隅ら（1999）は、障害のある子どもの発達にとり、適切な環境を整え、有効な働きかけをする最大の存在は第一に親であり、そのような親子を支える療育者等は、子どもの障害をめぐる親の認識を正確にとらえつつ、親の精神面を支えるような親援助プログラムを用意する必要があると指摘している。障害児自身のニーズに対応するだけでなく、親の精神的・情緒的安定をより積極的に支援していく事が重要とされる現在、親の心理特性を把握する一つの材料として、レジリエンスの実態を明らかにする意義は大きい。障害児を育てる母親のレジリエンスの実態を明らかにすることは、支援者が、クライエントである母親の精神的健康状態を把握し、母親支援の方向性を導き出す一つの材料になるだろう。

本研究の目的は、障害児を育てる母親のレジリエンスがどのような要素から成り立っているかを明らかにすることである。明らかになった構成要素をもとに、障害児を育てる母親のレジリエンスの実態と今後の課題について考察する。

2．方法

2.1. 調査対象者・調査方法

障害児を育てる母親を対象に、半構造化面接による面接調査を実施した。調査対象者は、筆者の知人であるため、予め一定のラポールが形成されている。また、本研究の目的についても同意が得られたため、調査対象者とした。

表1. 調査対象者の属性

	対象者A	対象者B	対象者C
母親の年齢	48歳	49歳	49歳
子どもの属性	第2子	第1子	第1子
子どもの学年	高2	高2	高1
子どもの性別	女	男	女
子どもの主な障害名	知的障害を伴う自閉症	知的障害を伴う非定型自閉症	知的障害身体障害

調査対象者は、16〜17歳の障害児を育てる母親 3 名であり、子どもの性別は、男子 1 名、女子 2 名であった（表 1)。面接時間は、平均82分（SD=24）であった。

2.2　調査手続き

面接は、2009年11月28日から2010年11月19日の間に、各対象者に 1 回ずつ行った。倫理的配慮として、対象者には口頭により研究の趣旨とプライバシーの保護について説明し、同意を得た上で実施した。

河上（2009）を参考に、①子どもの診断告知を受けた時期、内容、受けとめ、②その後の経過と受けとめ、③現在の子どもの障害についての受けとめ、④今までの子育ての中で一番辛かった時の内容、⑤辛い時の自分なりの対処法、⑥子育ての中で気持ちが変化した時期と内容、⑦子育てにおいて、気持ちを前向きにするために最も役立った事という 7 項目について自由回答的面接を行った。

面接の内容は調査対象者の了解を得た後、IC レコーダーで録音した。録音した会話の逐語録を作成し、逐語化したデータ全てを分析対象とし、以下の手順で質的に分析した。

①　面接のデータを文脈に分け、各文脈において述べられているレジリエンスを構成する内容を明らかにし、コード化する。②全面接から得られたコードの統合、比較検討、分離、再編を繰り返し、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出する。③抽出したカテゴリーが、Grotberg（1995; 2003）の考えるレジリエンスの要素である《I have》《I am》《I can》に分類可能か否かを検討する。なお、Grotberg（2003）は、《I have》を External Supports（外的サポート）、《I am》を Inner Strengths（個人の内的強さ）、《I can》を、Interpersonal and Problem-Solving Skills（対人関係力、問題解決力）と定義している。

文章中コードは「　　」、サブカテゴリーは[　　]、カテゴリーは【　　】、要素は《　》で示す。質的データの真実性と厳密性を確保するため、データの解釈に当たっては、研究者 5 名により解釈の手続きやコード化ならびにカテゴリー化の方法に関して相互理解を得た上で、コード化からカテゴリー化の分類と確認を行った。

3．結果

3.1. カテゴライズの結果

各面接のデータを文脈に分け、各文脈において述べられているレジリエンスを構成する内容を明らかにしコード化した結果、91のコードが抽出された。

次に、全面接から得られたコードの統合、比較検討、分離、再編を繰り返し、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した結果、26のサブカテゴリーと、6 のカテゴリーが抽出された。

最後に、抽出されたカテゴリーを要素に分類した結果、Grotberg（1995; 2003）が提唱した《I have》《I am》《I can》3 要素ではなく、《I have》《I can》2 要素が抽出された。《I have》は、ソーシャルサポートに代表されるような外部サポートを意味し、《I can》は、個人がもつスキルを意味する。3 名の調査対象者による面接内容は、コード数91、サブカテゴリー数26、カテゴリー数 6、要素数 2 に分類された。図 1 に、カテゴリー一覧を示す。

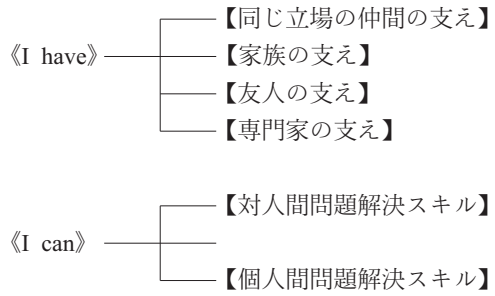

図 1．カテゴリー一覧

3.2.《I have》要素

《I have》に分類されたのは、【同じ立場の仲間の支え】【家族の支え】【友人の支え】【専門家の支え】の 4 個のカテゴリーであった。

3.2.1.【同じ立場の仲間の支え】

【同じ立場の仲間の支え】は、[話が出来る同じ立場の仲間がいる] [励ましてくれる同じ立場の仲間がいる] [体験談を話してくれる人がいる] の 3 個のサブカテゴリーで構成された。以下に、その詳細を示す。

① [話が出来る同じ立場の仲間がいる] では、「同じ立場の母親と話すことで、一人じゃないんだと思えた」、「先輩母親の話を聞くことで、自分たちが何

が不安でどの程度で幸せと感じられるかが整理された」「同じ境遇の仲間の存在が一番大きかった」等のエピソードが語られた。

②　[励ましてくれる同じ立場の仲間がいる] では、「お母さんたちが、大丈夫よ、よくなるわよってすごい言ってくれた」、「仲間の励ましがあった」というエピソードが語られた。

③　[体験談を話してくれる人がいる] では、「人の体験談等を聞くことで自分自身の視点が変わった」「人の言葉に気持ちを動かされた」というエピソードが語られた。

3.2.2.【家族の支え】

【家族の支え】は、[育児を支えてくれる夫がいる] [精神的に辛い時を支えてくれる両親がいる] [子ども自身の存在が自分を支えてくれる] の 3 個のサブカテゴリーで構成された。以下に、その詳細を示す。

① [育児を支えてくれる夫がいる] では、「夫が大事に育てていこうと言ってくれたことで吹っ切れた」、「医師から言われた内容にについて夫に聞いたら、まあ、いろんな意見があるからと言ってくれた」等のエピソードが語られた。

② [精神的に辛い時を支えてくれる両親がいる] では、「自分の親が子どものことを受け入れてくれた」「自分の母親がいてくれて気持ちが落ち着いた」等のエピソードが語られた。

③ [子ども自身の存在が自分を支えてくれる] では、「子ども自身が落ち込んでいる自分のことを慰めてくれる」、「子どもが自分の想像を超えて成長を見せてくれた」、「子どもの身体の面での成長の感動が大きかった」等のエピソードが語られた。

3.2.3.【友人の支え】

【友人の支え】は、[悩みを相談できる友だちや人たちがいる] の 1 個のサブカテゴリーで構成され、「相談できる人が周りにいた」、「友だちがいっぱいいて、いろんな人に悩みを話せた」等のエピソードが語られた。

3.2.4.【専門家の支え】

【専門家の支え】は、[具体的等バイスや適切な関わりをしてくれる専門家がいる] [親の振る舞いを示唆してくれる先生がいる] の 2 個のサブカテゴリーで構成された。以下に、その詳細を示す。

①　[具体的等バイスや適切な関わりをしてくれる専門家がいる] では、「早い期間に専門家から具体的等バイスをもらえた」、「医師から子どもの特徴について説明を受けた際、私たちが支えていくというメッセージが伝わってきた」、「誰かの紹介とかアドバイスで病院に行ってみて、みんないい人たちだと思った」等のエピソードが語られた。

②　[親の振る舞いを示唆してくれる先生がいる] では、「養護教諭に要求ばかりではなく自分からも動くように言われた」、「学校という一つの社会の中での我が子だと捉えるべきであると養護教諭から教わった」等のエピソードが語られた。

3.3.《I can》要素

《I can》に分類されたのは、【対人間問題解決スキル】【個人内問題解決スキル】の 2 個のカテゴリーであった。

3.3.1.【対人間問題解決スキル】

【対人間問題解決スキル】は、[人にしゃべる] [言いたいことはその場で言う] [自分から積極的に周囲に働きかける] [自分から専門家にアドバイスを求める] [人に話し、相手の反応をみることで自分を知る] の 5 個のサブカテゴリーで構成された。以下に、その詳細を示す。

① [人にしゃべる] では、「人にしゃべる」というエピソードが語られた。

② [言いたいことはその場で言う] では、「いちいち腹をたててもしょうがないが、ストレスを貯めるよりそこで言いたいことは言う」、「とにかく、今日こうだったんだと言う」というエピソードが語られた。

③ [自分から積極的に周囲に働きかける] では、「自分から動く事で世界が広がり、周りの理解を得る事が出来た」、「自分からみんなの中に入っていった」、「同じ境遇の仲間の間に自分でポーンと飛び込んだ」等のエピソードが語られた。

④ [自分から専門家にアドバイスを求める]では、「子どもの状態についてちゃんと分かる人に会いたいと思った」「相談機関で子どもについてどのようなタイプなのか具体的に教えてほしいとアドバイスを求めた」というエピソードが語られた。

⑤ [人に話し、相手の反応をみることで自分を知る] では、「自分が話したことによって相手がどう反応するかを見る」、「その日にその場で会った人に話して、相手の反応を見て自分を確認、検証する」

というエピソードが語られた。

3.3.2.【個人内問題解決スキル】

【個人内問題解決スキル】は、[やりがいを感じられる活動に取り組む] [気持ちを貯めこまずに発散する] [今後の見通しを持ちながら子育てをする] [環境を変えて気分転換する] [自ら何事も吸収しようとする] [日々の生活を楽しむ] [いつまでも引きずらず早いうちに解決する] [今を一生懸命やるしかない] [この子のことで今後いろいろあっても何とかなると思える] [嫌なことは忘れる] [何事にもどんと構えていられる]［自分自身でこの子を選んだと思える］の12個のサブカテゴリーで構成された。以下に、その詳細を示す。

① [やりがいを感じられる活動に取り組む] では、「自分が好きな仕事ができる」というエピソードが語られた。

② [気持ちを貯めこまずに発散する] では、「気持ちを貯めずに外に出す」、「書く」、「気持ちを放出する方がいいと思う」等のエピソードが語られた。

③ [今後の見通しを持ちながら子育てをする] では、「告知されたことによって今後の方向性を見据えて育てていけると思った」、「本人なりの頑張りを認め、高望みはしない」「無謀な希望みたいなものは小さくなってきて、もっと現実を捉えてくる」等のエピソードが語られた。

④ [環境を変えて気分転換する] では、「落ち込んでいる時に子どもとディズニーランドに行くことで気持ちの発散をした」、「自分が楽しめる所に行くことで、ネガティブな自分を変えたいと思った」等のエピソードが語られた。

⑤ [自ら何事も吸収しようとする] では、「自分自身の間口が開いていた気がする」、「いろいろなことを吸収したいという気持ちがすごくあった」というエピソードが語られた。

⑥ [日々の生活を楽しむ] では、「日々をどう楽しくやれるかだと思う」、「出来ないからというより、その日が楽しく終わったということが大切だと思う」というエピソードが語られた。

⑦ [いつまでも引きずらず早いうちに解決する] では、「いつまでも引きずらず、早いうちに解決する」というエピソードが語られた。

⑧ [今を一生懸命やるしかない] では、「ラッシュでも人が突っ込んでこようが私が子どもを守らなきゃと感じた」、「元には戻れないから、今を一生懸命やるしかないと思うようになった」というエピソードが語られた。

⑨ [この子のことで今後いろいろあっても何とかなると思える] では、「この子にもし障害がなかったらとあまり考えなくなり、それはそれと思うようになった」というエピソードが語られた。

⑩ [嫌なことは忘れる] では、「嫌なことはすぐ忘れるのでやっていける」、「忘れる」というエピソードが語られた。

⑪ [何事にもどんと構えていられる] では、「障害児を持つこと自体がしんどいことだから、大抵のことはたいしたことないと思えるようになった」というエピソードが語られた。

⑫［自分自身でこの子を選んだと思える］では、「自分自身がこの子を自分の娘としてベストだと選んだと思えた」、「生まれる前から今の状態になると分かっていても絶対にこの子を選ぶと思えた」、「自分でこの子を選んだのだから、これもいい人生だと思えた」等のエピソードが語られた。

4．考察

4.1. 調査対象者の属性・調査方法について

半構造化面接による面接調査を 3 名に実施した。調査対象者である 3 名の母親はすべて高校生の障害児を育てる母親である。子どもの幼児期、学童期、思春期にまたがり、小中学校入学・卒業等、様々なライフイベントを経験していることから、学齢期の子どもを育てる親としてインタビュー項目を振り返るには充分な子育て経験を積んでいると言えるだろう。また、幼児期、学童期、思春期は、子どもにとって生涯の中でも成長・発達がめざましい時期であり（中島ら, 1999）、同時に、就学、卒業等のライフイベントごとに、子育てを通して母親は様々な危機に直面するとされている（渡辺, 1982）。このような状況下の母親に面接することは、ストレスを経験しても、不適応に至らずうまく適応する能力であるレジリエンスの構成要素を明らかにすることに適していると言えるだろう。

また、調査的面接法に代表される半構造化面接調査は、構造と若干の自由度をあわせもつことで、ある方向性を保ちつつ、調査対象者の語りに沿って情報を得ることが可能な調査方法である（保坂ら;

2000）。この調査方法を用いたことによって、調査対象者である障害児の母親の内面を豊かな形でとらえることが出来たと言えるだろう。

4.2. カテゴライズについて

本研究の目的は、障害児を育てる母親を対象に、障害児の子育てを経験することによって母親自身のレジリエンスがどのように構成されるかを、対象者らの発話を質的に分析し明らかにすることであった。対象者の発話データの分析の結果から、《I have》《I can》という2個の要素でレジリエンスが構成されていることが明らかになった。さらに、この2個の要素からは、【同じ立場の仲間の支え】【家族の支え】【友人の支え】【専門家の支え】【対人間問題解決スキル】【個人内問題解決スキル】のカテゴリーが抽出された。当初、我々は、Grotberg（1995）に基づき、《I have》《I can》《I am》の3要素に分類することを試みたが、《I have》に比べて《I can》《I am》の分類は困難を極めた。これには、先行研究との調査対象者の違いが原因の一つであると考えられる。大学生を対象にレジリエンスの構成要素を明らかにした先行研究でも、《I can》《I am》を一つの構成要素《I can/am》として扱っており（Hiew et al.; 2000）、Grotberg（1995）を元に、新たな分類方法が提案されている。

Grotberg（1995）は、《I am》をinner strengths（個人の内的強さ）とし、個人の性格的な強さが《I am》であるとしている。しかし、我々は分析を重ねていく中で、本研究における調査対象者から語られたエピソードには、各々の性格的な強さを表すような《I am》要素は見受けられなかったため、《I have》以外の内容は、すべて獲得されるスキルである《I can》だと判断した。また、《I am》のような性格的な強さは、《I can》である母親自身のスキルを基盤として、持ち得るものであると解釈した。また、《I can》は、個人がもともと持っている特性ではなく、獲得されたスキルであると考えられることから、様々な角度からの介入が可能であると言えるだろう。教員や心理職等、障害児を育てる母親を支援する立場の人間が、母親のレジリエンスの実態を捉え、支援の方向性を導き出すことは、母親の精神的健康を維持するための大きな役割を担うと考えられる。

4.3.《I have》要素について

《I have》では、【同じ立場の仲間の支え】【家族の支え】【友人の支え】【専門家の支え】の4個のカテゴリーを抽出し、サブカテゴリーとして、【同じ立場の仲間の支え】では、[話が出来る同じ立場の仲間がいる] [励ましてくれる同じ立場の仲間がいる] [体験談を話してくれる人がいる]、【家族の支え】では、[育児を支えてくれる夫がいる] [精神的に辛い時を支えてくれる両親がいる] [子ども自身の存在が自分を支えてくれる]、【友人の支え】では、[悩みを相談できる友達や人がいる]、【専門家の支え】では、[具体的等バイスや適切な関わりをしてくれる専門家がいる] [親の振る舞いを示唆してくれる先生がいる] が抽出された。中でも、障害児を育てる母親にとって、同じ立場の母親の存在は、子どもに関する様々な情報を得られると同時に、ピアカウンセリング的な関わりを持てる存在であると予測できる。本研究の調査対象者3名すべてからも、辛い時をお互いに支え合い、お互いの思いをざっくばらんに打ち明けることで、自分は一人ではないんだという思いを持てたことが、自身を支える大きな要因の一つであるという思いが語られている。

河上（2009）は、在宅中心静脈栄養法を施行している学童期の子どもと親を対象に、Grotberg（1995）に基づいて彼らのレジリエンスを分類し、親のレジリエンスである《I have》要素を【安定している家族関係】【他児の母親とのネットワーク】【自分を奮い立たせてくれる存在】【必要時、アクセスできる健康、教育、社会サービス】にカテゴリー化した。それぞれのコードをみると、【安定している家族関係】は、本研究における【家族の支え】と、【他児の母親とのネットワーク】は、【同じ立場の仲間の支え】と、【自分を奮い立たせてくれる存在】は、【家族の支え】の中の [子ども自身の存在が自分を支えてくれる] と、【必要時、アクセスできる健康、教育、社会サービス】は、【専門家の支え】と類似していると考えられ、先行研究に大きく逸脱することなくカテゴリー化できたと解釈できるだろう。

4.4.《I can》要素について

《I can》では、【対人間問題解決スキル】【個人内問題解決スキル】の2個のカテゴリーを抽出し、サブカテゴリーとして、【対人間問題解決スキル】では、[ひとにしゃべる] [言いたいことはその場で言う] [自分から積極的に周囲に働きかける] [自分か

ら専門家にアドバイスを求める] [人に話し相手の反応を見ることで自分を知る]、【個人内問題解決スキル】では、[やりがいを感じられる活動に取り組む] [気持ちを貯めこまずに発散する] [今後の見通しを持ちながら子育てをする] [環境を変えて気分転換する] [自ら何事も吸収しようとする] [日々の生活を楽しむ] [いつまでも引きずらず早いうちに解決する] [今を一生懸命やるしかない] [この子のことで今後いろいろあっても何とかなると思える] [嫌なことは忘れる] [何事にもどんと構えていられる] [自分自身でこの子を選んだと思える] の12個が抽出された。

サブカテゴリーやコードを見ると、【対人間問題解決スキル】は、他者と関わりながら母親自身が気持ちを発散したり、自己理解を深めることで、子育てにおける様々な問題を解決していこうとするカテゴリーであると考えられる。これらの内容からは、母親自身のソーシャルスキルや積極性を読み取ることができるだろう。【個人内問題解決スキル】は、母親が主体となって行動したり、考えたりする行為によって子育てにおける様々な問題を解決していこうとするカテゴリーであると考えられる。また、その内容は、他のカテゴリーに比べて多岐にわたった。これは、母親個人が主体となって問題を解決するスキルであるからこそ、個人の価値観や振る舞いが反映されやすいためではないかと考えられる。サブカテゴリーやコードを見ると、母親自身の楽観性や前向きさを示唆するような内容が多く語られていた。石毛・無藤（2005a; 2005b）は、調査対象者に相違はあるものの、レジリエンスを構成する要素の一つとして楽観性や前向き性を挙げており、重要な構成要素の１つであると言えるだろう。

4.5. 今後の課題

本研究の結果は、既存のレジリエンス研究で得られた内容から大きく逸脱することなく（河上, 2009; 石毛・無藤, 2005a; 2005b）、さらに障害児を育てる母親のレジリエンスという次元に焦点を絞った構成要素を抽出できたと解釈できるだろう。

今後の課題として、以下に提起したい。

障害児を育てる母親のレジリエンスを明らかにする際の方法論的課題についてである。本研究では、半構造化面接調査を用いて障害児の母親のレジリエンスを質的に研究することで、その構成要素を明らかにするための１つの足がかりを得ることが出来たと言えるだろう。しかし、北村（2005）は、質的研究は独自の信頼性、妥当性、及び客観性に関し、未だ曖昧な部分も残されていると指摘している。今後は、本研究によって得られた結果をもとに、さらに信頼性、妥当性の高いレジリエンスの構成要素を明らかにする必要がある。具体的には、質問紙調査を用いて、障害児の母親のレジリエンスを定量的に検討し、その実態を多面的に明らかにすることでさらなる知見を積み重ねることが望まれる。また、より信頼性・妥当性の高い知見を得ることで、汎用性のある母親支援の介入方法が検討できると考える。

謝辞

本研究を実施するにあたり、面接調査にご協力いただきましたお母様方に感謝申し上げます。

引用文献

American Psychological Association（2008）http://apahelpcenter.org/featuredtopics/ The American psychological Association: The Road to Resilience on-line, http://helping.apa.org/resilience.90.9.2008.

藤原千恵子（2007）メンタルヘルスケアにおける予防的看護ケア　患者と家族のレジリエンスの促進をめざして．看護研究, 40(6), 45-53.

藤原千恵子（2009）患者のレジリエンスを引き出す看護職者の支援．看護研究, 42(1), 37-44.

Grotberg, E. H.（1995）A guide to promoting resilience in children: strengthening the human spirit. Bernard van Leer foundation.

Grotberg, E. H.（1999）Countering depression with the five building blocks of resilience. Reaching Today's Youth, 4(1), 66-72.

Grotberg, E. H.（2003）Resilience for today: gaining strength from adversity. Praeger.

橋本厚生（1980）障害児を持つ家族のストレスに関する社会学的研究‐肢体不自由児を持つ家族と精神薄弱児を持つ家族の比較を通して‐. 特殊教育学研究, 17(4), 22-33.

日高潤子・尾崎啓子（2007）適応指導教室における不登校中学生の回復に関する研究(1)‐卒業生２名の面接調査によるレジリエンスの観点からの検討‐. 目白大学心理学研究, 3, 51-61.

Hiew, C. C.（1998）Child resilience: conceptual and evaluation issues. 23rd Child learning forum, 21-24.
Hiew, C. C., Mori, T., Shimizu, M., & Tominaga, M.（2000）Measurement of resilience development: preliminary results with a State-Trait Resilience Inventory. 学習開発研究, 1, 111-117.
保坂亨・中澤潤・大野木裕明編著（2000）心理学マニュアル面接法.　北大路書房.
井隼経子・中村知靖（2008）資源の認知と活用を考慮したResilienceの4側面を測定する 4 つの尺度. パーソナリティ研究, 17(1), 39-49.
稲浪正充・西　信高・小椋たみ子（1980）障害児の母親の心的態度について. 特殊教育学研究, 18(3), 33-41.
稲浪正充・小椋たみ子・西　信高（1994）障害児を育てる親のストレスについて. 特殊教育学研究, 32(2), 11-21.
石毛みどり・無藤隆（2005a）中学生におけるレジリエンシー（精神的回復力）尺度の作成. カウンセリング研究, 38, 235-246.
石毛みどり・無藤隆（2005b）中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連-受験期の学業場面に着目して-. 教育心理学研究, 53, 356-367.
石毛みどり・無藤隆（2006）中学生のレジリエンスとパーソナリティとの関連. パーソナリティ研究, 14(3), 266-280.
石井京子（2009）レジリエンスの定義と研究動向　看護研究, 42(1), 3-14.
石井京子・藤原千恵子・河上智香・西村明子・新家一輝・町浦美智子・太平光子・上田恵子・仁尾かおり（2007）患者のレジリエンスを引き出す看護者の支援とその支援に関与する要因分析. 日本看護研究学会雑誌, 30(2), 21-29.
石隈利紀・上村恵津子（2001）障害児を持つ親に関する研究の動向 教師からの有効な支援の方法を探る視点から. 筑波大学心理学研究, 23, 187-199.
葛西真記子・澁江裕子・宮本友弘・松田保（2010）スポーツ活動経験とレジリエンスの関連-時間的展望,身体的自己知覚の視点から-. 教育実践学論集, 11, 39-50.
河上智香（2009）在宅中心静脈栄養法を施行している学童期の子どもと親のレジリエンス. 看護研究, 42(1), 27-35.
河上智香・西村明子・新家一輝・石井京子・町浦美智子・太平光子・吉川彰二・上田恵子・仁尾かおり・藤原千恵子（2005）レジリエンス概念と今後の研究動向. 大阪大学看護学雑誌, 11(1), 5-10.
北村勝朗・斎藤茂・永山貴洋（2005）優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか？‐質的分析によるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築. スポーツ心理学研究, 32(1), 17-28.
北沢清司（1992）発達障害児・者の家族へのサポート. 発達障害研究, 14, 81-90.
工藤麻由・奥住秀之（2008）障害児をもつ親のストレスに関する文献検討. 東京学芸大学紀要総合教育学系, 59, 235-241.
Masten, A. S., Best, K. M., & Garmezy, N.（1990）Resilience and development: contributions from the study of children who overcome adversity. Development and Psychopathology, 2, 425-444.
蓑毛良助（1984）心身障害児をもつ母親のストレス構造. 鹿児島経済大学社会学部論集, 3(1), 65-100.
三木安正（1956）親の理解について. 精神薄弱研究, 1, 4-7.
三隅輝見子•清水康夫•本田秀夫（1991）発達障害児の早期療育における親援助プログラムの開発（第1報）－通園療育期に入った場合の障害をめぐる親の認識－. 安田生命社会事業団研究助成論文集, 27(1), 79-89.
宮地志保（2004）レジリエンス概念の探索的研究‐教育実習をストレッサーとして‐. 心理発達科学専攻修士学位論文概要, 290-291.
森敏昭・清水益治・石田潤・冨永美穂子・Hiew, C. C.（2002）大学生の自己教育力とレジリエンスの関係. 学校教育実践学研究, 8, 179-187.
中島義明・安藤清志・子安増生・板野雄二・繁桝算男・立花政夫・箱田裕司編集（1999）心理学辞典. 有斐閣.
中野良哉（2008）臨床実習における状態：特性不安とレジリエンスの関連. 高知リハビリテーション学院紀要, 9, 1-7.
新美明夫・植村勝彦（1980）心身障害幼児をもつ母親のストレスについて‐ストレス尺度の構成‐. 特殊教育学研究, 18(2), 18-33.

新美明夫・植村勝彦（1987）学齢期心身障害児をもつ父母のストレス‐代表事例による母親のストレス・パタンの分析‐. 特殊教育学研究, 25(2), 29-38.

仁尾かおり（2008a）先天性心疾患をもって成長する中学生・高校生のレジリエンス（第1報）‐背景要因によるレジリエンスの差異‐. 小児保健研究, 67(6), 826-833.

仁尾かおり（2008b）先天性心疾患をもって成長する中学生・高校生のレジリエンス（第2報）‐病気認知によるレジリエンスの差異‐. 小児保健研究, 67(6), 834-839.

仁尾かおり（2009）先天性心疾患をもつ思春期の子どものレジリエンス. 看護研究, 42(1), 15-25.

仁尾かおり・藤原千恵子（2006）先天性心疾患をもつ思春期にある人のレジリエンスの特徴. 日本小児看護学会誌, 15(2), 22-29.

西大輔・松岡豊・神庭重信（2010）レジリエンス研究の理解のために　Richardsonのメタ理論とアロスタシス. 精神医学, 52(3), 289-295.

西坂小百合（2006）幼稚園教師のストレスと精神的健康に及ぼす職場環境、精神的回復力の影響. 立教女学院短期大学紀要, 38, 91-99.

小椋たみ子・西　信高・稲浪正充（1980）障害児をもつ母親の心的ストレスに関する研究（Ⅱ）. 鳥取大学教育学部紀要（人文社会科学）, 14, 57-74.

大石郁美・岡本祐子（2009）青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 8, 43-53.

小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治（2002）ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性-精神的回復力尺度の作成-. カウンセリング研究, 35(1), 57-65.

Rutter, M.（1985）Resilience in the face of adversity: protective factors and resilience to psychiatric disorder. British Journal of Psychiatry, 147, 598-611.

坂口美幸・別府哲（2007）就学前の自閉症児を持つ母親のストレッサーの構造. 特殊教育学研究, 45(3), 127-136.

佐藤琢志・祐宗省三（2009）レジリエンス尺度の標準化の試み『S-H式レジリエンス検査（パート1）』の作成および信頼性・妥当性の検討. 看護研究, 42(1), 45-52.

澤田和美・上田礼子（1997）病気の乳幼児と母親の養育性‐強靭性（Resilience）の育成の視点から‐.小児保健研究, 56(4), 562-568.

田中正博（1996）障害児を育てる母親のストレスと家族機能. 特殊教育学研究, 34(3), 23-32.

種子田綾・桐野匡史・矢嶋裕樹・中嶋和夫（2004）障害児の問題行動と母親のストレス認知の関係. 東京保健科学学会誌, 7(2), 79-87.

刀根洋子（2002）発達障害児の母親のQOLと育児ストレス‐健常児の母親との比較‐. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 15, 17-23.

植村勝彦・新美明夫（1981）心身障害幼児をもつ母親のストレスについて‐ストレスの構造. 特殊教育学研究, 18, 59-69.

植村勝彦・新美明夫（1982）心身障害児をもつ母親のストレスについて‐ストレス・パタンの分類‐. 特殊教育学研究, 19(3), 20-29.

Wagnild, G. M., & Yong, H. M.（1993）Development and psychometric evaluation of the resilience scale. Journal of Nursing Measurement, 1(2), 165-178.

渡部奈緒・岩永竜一郎・鷲田孝保（2002）発達障害幼児の育児ストレスおよび疲労感‐運動発達障害児と対人・知的障害児の比較‐. 小児保健研究, 61(4), 553-560.

渡辺久子（1982）障害児と家族過程. 講座・家族精神医学3ライフサイクルと家族の病理, 弘文堂, 233-253.

Actual Situation of Resilience of Mothers of Disabled Children

Maki HASHIMOTO*, Yosuke HASHIMOTO,***, Masayuki KUMAI******

*School of Humanities, Meisei University
**Graduate School of Educational Informatics / Education Division, Tohoku University
***Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science
****Graduate School of Educational Informatics / Research Division, Tohoku University

ABSTRACT

In recent years, many studies on resilience have been reported throughout the world. However, there have been only a few studies on resilience in Japan, and none about the resilience of mothers of disabled children. This study was carried out to clarify the actual situation regarding resilience of mothers of disabled children. A total of 3 mothers who had challenged children ranging in age from 16 to 17 years were involved in our semi-structured interview survey. The results show that (1) 91 codes, 26 sub-categories and, 6 categories were selected in the interviews, and (2) resilience can be classified into 2 factors,《I have》and《I can》. Based on these findings, the features of the constituents and problems to be solved are discussed.

Key words: resilience, semi-structured interview, mothers of disabled children